

申込日 年 月 日

※ 刊行物 (新聞・雑誌・書籍)

<p>日本水道新聞 (週2回-毎週月・水曜日発行/大判) 1ヵ月 2,600円 1ヵ年 31,200円</p>	<p>日本下水道新聞 (週1回-毎週水曜日発行/大判) 1ヵ月 1,650円 1ヵ年 19,800円</p>	<p>水道公論 (月刊-毎月1日発行/B5判) 1部 1,527円 (送料・税込み) 1ヵ年 18,324円</p>
<p><input type="checkbox"/> 新規購読お申込み <input type="checkbox"/> ご購読者の送付先等変更連絡</p> <p>(☑して下さい) <input type="checkbox"/> 日本水道新聞 部 <input type="checkbox"/> 日本下水道新聞 部 <input type="checkbox"/> 水道公論 部</p>		
<p>● 下水道事業の手引 令和元年版 (A 5判・本体価格5,300円+税) (送料900円、5冊以上は送料無料、沖縄県のみ1,800円) 【 部】</p>		
<p>● 改訂版 すいどうの楽学 初級編 (A 5判・本体価格1,200円+税・送料実費 (3冊以上は無料)) 【 部】</p>		
<p>● 時代の伝承 東京水道の軌跡 (A 5判・本体価格2,500円+税・送料実費) 【 部】</p>		
<p>● 下水道工事適正化読本2018 (A 4判・本体価格3,000円+税・送料実費) 【 部】</p>		
<p>● あなたならどう判断する? 上下水道事業へ関わる方々の危機管理 (A 5判・本体価格1,500円+税・送料実費) 【 部】</p>		
<p>● 水処理工学の基礎(上) (A 5判・本体価格3,750円+税・送料実費) 【 部】</p>		
<p>● 水処理工学の基礎(下) (A 5判・本体価格3,750円+税・送料実費) 【 部】</p>		
<p>● 水道を語る-10年間で紡いだ珠玉のエピソード- (B 5判・本体価格2,200円+税・送料実費) 【 部】</p>		

この他の書籍の在庫は、電話 (03-3264-6721) でお気軽にお問い合わせ下さい。

お名前	
お勤め先	
ご所属	
送付先住所	〒

欄外に送本のため、必ず勤務先若しくはご自宅等確かなご連絡先をご記入をお願いします。

市外局番	市外局番	局番	番号	番号
市外局番	市外局番	局番	番号	番号
市外局番	市外局番	局番	番号	番号
市外局番	市外局番	局番	番号	番号

フリーFAX番号 ☎0120-036725

海外水ビジネスの眼

タイに旅行、出張、駐在した経験がある方であれば「存じのこ」と思うが日本人が現地の水道水を直接飲むことは本人がホテルなどにはペットボトルの水がサービスでついているので、それを飲むことが一般的だ。用心深い方になると、磨き後の水がペットボトルの水を使用している。いったん水にあたる水と、仕事の行程や楽しい旅行も台無しに水をお飲まないよう用心することを強くお勧めする。

厚生労働省の資料によるとタイの水道普及率は50%を超え、都市部では76%となっており、多くのタイ人が水道にアクセスできる環境にある。では、地元の人々を直接飲んでみると、ほとんどどのタイ人も水道水を直接飲むことはない。タイ人に水道水を飲むか聞いてみたことがあるが「タイの水道水は生活水であって飲料水とは異なるもの」と答えて返ってきた。基本的には「水道水を直接飲む」という考え自体がないタイ人が多いのが実状のようだ。

タイの水道関係者の話によると、タイの水道水質基準は浄水場の出口水質で定められており、浄水場では飲料レベルまで処理が行われている。しかし、配水管網の整備状況が悪く、配水の過程で水質が悪化してしまうようだ。滞在したホテルで残留塩素を測ったことがあるが、

タイの水道事情

がおわかりいただけると思う。このようなタイにおいて、日本の水道水質レベルの水道水を配水した場合、タイ人従業員が飲用するかを工業団地に居住する企業の責任者にアンケートを行なったことがある。その結果は、回答があった8社のうち6社が「飲用しない」、1社は「飲用させたいがタイ人の説得は難しい」と否定的な意見がほとんどだった。その理由としては「ペットボトルは透明で中身が見えるが、蛇口から出る水は中が見えないので不安」「配水される衛生管理がしっかりできているか

残留塩素は検出されず安全とは言えない状況だった。したがって、タイでは飲料水、調理用水はボトル水を使うことが一般的になっており、すでに定着している。販売店には日本では、あまり見ない大型サイズのボトルも普通に売られており、コンビニエンスストアなどで販売されている500mlのペットボトルは売られている。日本の水道水は1立方メートル(500リットルのペットボトル2000本本分)で約160円(全国平均)、さらにタイと日本の所得格差を考えると、タイ人は大変高価な飲用水を使用している

不安」と安全性よりは安心が得られないことが背景にあるようだ。このように、タイでは水道への不安が広く定着しており、ボトル水を飲用として使用する社会的な仕組みもできあがっていることから、水道水の水質の向上や臭気の抑制など日本が比較的得意とする技術の出番はしばらくなさそうだ。

しかし、その調査の中で「飲用する」と回答した企業が1社だけあったので紹介したい。その工場では、工業用水を自社工場内に設置したRO膜設備で処理し、工場内各所に設置した蛇口まで配管で配水しており、タイ人従業員がすでに飲用している。飲用水の工場内への配水はタイ人従業員の福利厚生の一つとして取り組んだが、当初はタイ人従業員の理解が得られず、飲用するタイ人従業員はいなかった。そこで、工場内に配水されている飲用水と市販されているペットボトル水の双方を水質分析に出し、分析の結果をタイ人従業員に示した。さらに責任者自身が率先して飲用水を飲むようにしたところ、タイ人従業員もようやく飲むようになった。今では、この飲用水はタイ人従業員にも好評で、自宅から大型のポリタンクを持参し持ち帰る従業員もいるとのことであった。

タイの水道事業において日本企業の水ビジネス獲得には高い障壁があることを確認したものの、今後のタイの発展とインフラ整備の中で、日本で培った技術やノウハウが必要とされる時が来る可能性を秘めていると感じた。(naam)